文久記事　十二

内閣文庫
和書
類
二七〇八六
號
五一
冊
一五一
函
一
架

内閣文庫
番號 和 27086
冊數 51 (17)
函號 151 1

国立公文書館
National Archives of Japan

文久二戌年正月十五日浪人共懐中所持之写

斬奸趣意書

元堀織部正家来
当時浪人
三浦七之介名清秀 全

右之人織部正先祖堀尾[illegible]後世天正元年於府中
被召御目見之所味方第一之忠[illegible]御当家十五代相続之
十八代之間忠勤無怠当織部正外聞有之候
御奉行相勤当時之[illegible]当時無之勤功候
至[illegible]来[illegible]容[illegible]不穏[illegible]殺害
恐[illegible]勤[illegible]之[illegible]人

しかるに及相訊候処此節偏ニ及宗門尚以疑入分候
然ニ当年ハ申年　井伊掃部様江被登
及根儀ニ付　異人渡来之穀ニ而兎角可令詮議
之者共ニ付而右様及穀根儀ニ付南蛮人ニ付
相改候及此儀対シ度織部正殿上意之通
しかるに様子御座候得共追而ハ切支丹様子
此節候ニ付而中ニ而茂若斎等ハ附而候与云々
其内対シ度御慈中ニ申候　此来今代二月十四日
右同道高山宗と於之候条申候
右近高山南坊と云し同道師与南坊様出町人

右十一月之入牢被申付
一　同三年三月廿八日夜日本橋ニ而被召捕弥兵衛と申者
同心両人ニ而相改候所其外御尋被成候ニ付
小倉屋と申者娘又清兵衛之内此外之者井伊家
之ニ之者清兵衛と申者ニ而御様子ニ而ハ加
宗門之者ハ英吉利之儀之節中ニ而右之徒
之様ニ申付申候ニ付其外御尋被成候様子
被仰付候　上様ニ者御渡之儀ハ御止事ニ付
同様ニ者ニ而同所外ニ一時ニ宗門被召出候

此外和歌なとも有之となん

又　　　　　　決死之前書

一　長州藩臣長井雅楽辞世之字

欲報君恩業未央　自羞四十四年狂

即今成佛非我志　願帥天魔輔日光

君のため捨る命は惜からて

たゝおもはるゝ國の行末

一　京師之儒生頼三樹三郎ヵ詩

蒼松緑得有江城　三百年来晩翠清

若為織風変其色　世間誰許木公名

一　和宮様江御離縁に付御帰京

二度と降りし都に帰りて

清き流を濁さぬやうに

又御所之返歌をあそはされ候ニ付

惜しまじや君と民との為ならは

身は武蔵野の露と消るとも

一　品川町之町医師太田玄庵娘横濱岩亀楼岩亀楼抱

抱拾右衛門当十七歳十月十三日召出之人新吉
原町弐丁目甲斐屋抱平子の日より中川売出
去ル年両親大病ニ而手伝候甚手習之事ニ而
其父母引続病死いたし候後抱主甲斐屋抱へ置
諸事差出仕候一昨年十月中より病身容体故抱主并
御して売り八兵衛当主人岩瀬屋方ニ預置抱主も赤坂ニ差出
其砌備後屋之人相立候而立寄候而仰せ付候
候様無之難渋之躰ニ付致方も無之右之人少人数
右ニ付夫人無之御勤難儀ニ而是迄之勤方
勤務中病中少し候先当主当人之人納定いたし

一 引続中ニ者猶々不如意ニ相成いろ〳〵異見いたし重畳候
為勤候兼而当暮中谷中天王人ニも甚抱之手伝いたし中略て
候其中より無少入申上いろ〳〵差出金子弐百両
右之者夫婦ニいたし候処又勤候ニ付金弐両頂戴いたし候而抱
其之申立之人右之勤来遠縁之八兵衛候抱一向
勤候付難御之人申出いろ〳〵差抱き
候処引出来いたし候

右等之趣孝心ニ付之通

其上若年之方人
勤父母之取人抱

あまき人口論したり御国の御恩を知らざるものとあ
きらめ見世物もなきものなき芸無しとして見せ物の
母今にて抜き身の身を切る長刀と以申し抜き身の長刀の芸果を
たゞ之を見世物の利とし帰らせ見せて人々へ候らなき父
母に仕業し金銀の為とて亦此の悪徒の義を以て第一之
かゝる抜き身しても如何くしての道をも尋ねし候の所を
以後は申し候今のみに人の之の宮に出さし候
目の前此心を以て申しまじく候
宮様をもいたし候の如き有
不届の者ヶ所の御国の御さし

一 於横浜千八百六十三年五月十一日　日本文久之戌年四月
十三日テキソンより通辞之石斧次郎を以て外国英文和解
斧次郎君に
汝今日余が出蔵に及び見し所を見て人銀の事を伝せり余
竊に云る所の故を以て千事相定し此の言に其人等
横浜に居る日本人種々の事を云ふを聞き中に此等が
りし出蔵之て抜場に於て是等を見て是人に逆ひたりといへり
日本之内外列侯列帝陸にて地々人民等の動を為すの
余側に出蔵して宮之附抜業し地を定めらる
たり今何の故を以て人民を掃し是すら地を奪ひて

是迄人ニ構ハらす守大名等外国公使之一人として不為哉
思ハ居候ニ付大ニ作意申しく能ハ生せり余ハ候ニ御承
今ハ人民之外国公使へ應接せり大名之是ならん為也
申ニ付英国政府ニ對して日本之使節為ニハ「ハイテハルビ」
倫敦府ニ有之華麗宮殿之名 饗し候ハ是へし然ハ政府ニ對して八「トイル
レーリース」巴里都ニ有る華麗宮殿之名 を饗ハし是へし然と云ハゝ二国界して
許さんや否や彼必是を許さゝるへし
英仏二国之「ハイテハルビ」及ひ「トイルレーリース」ニ於て日本之使節ニ饗し
如し所ニ余僅之日本政府今彼外国公使ニ對し浜殿ニハ
饗し是之ハ取ニ為ハ是先方之家ニ出て公使を招く事ハ政用さ

迎し日本政府ニて如何なる所作をなすとも異国ニて如何とも
為す人ある所なれハ其是ハ加へのミて被成ハ日本政府
之権威張く成るへし其所ハ國内ニ於て外国人を重んずハ日本
之威勢を失ひ弱く成るハ之外国人を日本之法律を用ひ
されハ其之異国人を居らしめたる所ニて支那是なり不弱
く成るハ是異人之自由之法律を自由しコレニエルヽ下ヽ
住ミ於て羅人なるとも日本政府ニて自由之是れ雇ふ
を彼是を余儀なく異国ニ外人ニ住居ニ居らしめ公使を
外人と共ニ中川應接之場所ニ居らしめ事ニ附て然れハ一人
公使江戸ニ住り其外ニ在る然ハ之然ハ一云

僕我世之しても伝聞申し考へ尚以是之云候ても当人へと離き居
と我様ニもう広く千事行候離し候而元市頭さへ金銀申し
是亦人自由に政体に付て行之人もしと云一家不足
一旦結ゝ々金約を二三年し寄へ夏草すゝ中能候
日本ゝ一旦日本人へ英吉利仏郎西魯西亜米氏ても
我日本ニ許さ候御国とも雨許すへき通候也
必候許さ之し日本ニ而金約我結ぶへ八章実通申候
事我知らさ通へ候　右庵云の昔法ゝ在て八英明
出て手法出て西洋ゝ乎上に打れ尤能ゝ者も時勢者
以不是して政府ゝ盲ゝ我れゝ船我遣し大砲我揃へ

発候して御国ゝ候帯らき手わ者候ゝ被行候
英吉政府し費用八二万万ドルラル也手物ゝ日本ゝ責
用と相返せゝ行尤日本ハ英ゝ富饒之由也日本ゝても
英のことく綿布織ゝ為ゝ糧且我用候八三之機出候之策
言待申ゝ元済すゝ一金ゝ波之為我結らハ金ゝ日本我事
事すし一様ゝ之被らされハ也余ゝ方ゝ言ハ海解すゝ事能
之さ候へし　海之多福のして是之応従昇ほ上すゝ我此の我
之足せ

海之観従く故

ーー二丁キリニ

箕作貞一郎譯

一佛郎西新聞紙之比八月二十二日　巴利人羅(ロ)尼(ニ)譯

政府也し使節ホ日本ニて要求之趣を承り佛政府ニて
支那ニて其軍艦を日本へ送るへき事を命したり又佛の使
節も佛ニ軍艦を送る事ハ日本ニ於て為
要求之返答次第大君へさへせんとおもへり大君ハ外國ニ対し
之要求ハ返答せさるへしと聞ゆ又大君ハ大名等ニ其好
之横ヲせんとするハ其故ハ大名等ハ外國人の日本ニ来る事
等を許せぬ也

政府也し使節を江戸ニ於て横濱ニ行けるに付其横
濱ニて使節を護衛すへき軍艦に行達ハ之
右し使節を却し斗り武士が以て直ニ居し同国
大威ニ於て騒乱せしめ諸侯ハ事ニ付て是ハ政府ニ
於て右ハ要事ニて今年外國人日本へ同意すへし
外國政府無上す之ニ依日本ニて三度と承候
此事ニ付て大騒動ありし
日本ニて江戸人大君ニ懐き候て大名ニ対し何等
なる事ありて数多之政府ニ於て改めて
騒き大名等ニ而ハ国内之の武士ニ於て

たり京之民ハ下様事を好む大君我好見して存思
きり居ニ長崎ニて役之此史目前之所綿從二人我
観ニ於て其役人ニ於ゐ其語を聞ひ罷せらるへし
一千八百六十二年第十月第十二日横浜ニて　日本新聞
事務宰相ニ於て承る
今月十七日薩摩侯ニ於て分取道中ニ於て英人銭若干薩州侯之
当所山口辺ニ於て英人を殺害し右ハ其後十四日薩摩侯之
又右ハ海岸之節之暴悪之暴虐なる事をも見て鎖刑
右流罪之民を殺害せしむるの後ニ於ても其後

吟味すへき重我若干之儀ニ付外国事務ニて承る
其上右之役人を殺傷し於て此地横浜我役之所知したる
右之事之ハ江戸人ニ承りたりとも
平日日本政府之役人ニ於て其の士官ニおゐての役所
をも将又是之暴虐之事実を相したる事を究竟
吟味すへき事難きことニ於ても当年之事なれ共
薩州ニて大不禮之事を厳有せす右ハ鎖港等の事
出て其政府ハ事分ニ於て我道理ニて其罪を厳正し
政府ニ於て其付之政府ニ於て大君ニ取扱ひ候
尚以て御沙汰候ニ付其後之暴虐をなしたる

当時に至り若我か体なるに定め已に悪情をなしたるとハ
台下之嫌好に由りて大かにして是非曾聴なれハ西戎にあ
交際に於て虚飾なる権柄を済して
英吉利及仏蘭西自由にも親睦友好之我か日本政府ハ
英吉利及仏蘭西之民を殺したる大暴威我行ひをなし抱
立致へり
之暴事二件に於て来る英吉利及仏蘭西政府へ對
助を乞ひ我目をも疏進し暴悪なる事を以て
於て日本政府之助我に一事も成せす為志さに
何ぞ日本政府に久しく保護なく速なる處

当を從ふて我か主民日本之裁判常に我か民と台下
随ひ而至せしらる時勢を論し台下吾らか生し悪みを
さらに我知らすに於て尚又之輯告を殺害人を以て生く
陽にて其薩摩之所為之込らしめる事我か係りなる所也
事我か得る暴人我か捕へて引渡を乞ひ張ふて前後
止りて決議し道理全く滅却せんとするに於ハ
而八右の如く推量せる所今日より十日之内に上洛之處
示意情なる之事を細密に論し尽く御返答
へき旨告知らし決ひ是又殺害人を捕へて死刑に所せ
人々我等に害民悪なる時日我か告知らせすんハ大君殿下

宰相たる當主を皇帝陛下之政府へ告知せん又書を以て
大君之政府ニ於てハ我之戦争の如くなさしめんバ我が僕の
英人を殺害したる暴徒凶悪なる悪業を犯したる者ハ大君之
領地なる光栄を以て解すべき謗毀し戦争を得るに
らしめんには必ず此事を以て各列額政府に於て非難すべし
其急なる戦争を各列額全権之使へ エトワルトストレヤニニトル
自記日本在留書記官ルエウスデン 從八月廿三日出ル

一 文久二戌年四月廿四日 松平豊前守殿御渡

今般十万石以上之面々京都為御警衛在京ニ
被命候者前年之通り別紙割合を以て相勤可申候

一 出京御警衛之義ニて十万石以上之面々之義ニて可相勤候
右之紙十万石以上之面々ニて可相勤候

京都御警衛
前年
上杉弾正大弼
松平紀伊守
松平大膳大夫
（四月 六月迄）

松平加賀守
南部美濃守
松平備前守
之…飛驒守
（七月 九月迄）

丹羽左京大夫
戸田采女正

十月ヨリ
十二月迄

大目付
御目付江

京都御守衛御用掛之衆中 御目付ニ而
御所向江参候節 御供之者召連候節
出来之衆中ニ而 御供之面々召連候人数
右銀十万石以上之面々ニ而可被相達候

四月

一 同年五月十二日 井上河内守殿御渡候書付
非常合図之儀 浜御殿ニ而打上候大筒十発打候ニ
付 非常之節御台場并御備場ニ而御用相勤候面々
并其外海岸附之面々 大筒打候節者 小具
足着之大筆(?)御書付ニ而 御用場ニ而相勤可申候
條(?)

右之通万石以上以下之面々へ可被相触候

五月

一 文久三亥年六月二日於京都水野和泉守殿御渡候
書付

覚

一万石以上之面々今度御親兵之義ニ付御沙汰御座
出来候ニ付依願ニ而差出石高割ニ而可差上候　天気右割合を以
十ケ年ニ而差出候親兵高ニ応し差出候人数割合ニ
き差送り候通ニ而可為伺候

但旗本万石以上之面々も右ニ准し宇都宮代上京可致事
別段ニ御親兵上京ニ不及候
右者万石以上之面々ニ而兵隊繰出之節可相心得事

四月

叡慮之写

亥三月七日頭衆於御詰所拜見被　御付候

近来醜夷逞猖獗数覬覦　皇國実不容易形勢ニ付
萬一於有汚國躰歟　神器之事ニ者被為対
列祖之神霊是全当今寡徳之故ト深被痛
宸衷候ニ付蛮夷拒絶之奉ニ
叡慮奮起固有之忠勇速建掃攘之功上安
宸襟下救万民令黠虜永絶覬覦之念不汚　神州
不損国躰ト之　叡慮被為在候事
攘夷拒絶之期限於一定者闔國之人民勠力可励

忠誠ニ者勿論之儀候先年来有志之輩以誠忠報国
之絶忠致ニ周旋候儀厳慮不斜候依之猶又被洞
開言路ニ草莽微賤言達ニ厳聞忠告至當之論不
淪没壅塞ニ様ト之深重之思召候間各不韜忠告学
習院参上御用掛之人々ニ可ニ揚言被
仰出候間乱雑之儀無之様相心得可申出候事
連日従巳刻限申刻於九之日 七六日従午刻限
申刻

一文久三亥年五月十九日正写
当月十日夜亜墨利加蒸気船被上之関ゟ帆
来候ニ付豊浦郡府中ニ今浦辺ニ而大膳大夫
所持之軍艦致迎撃被及攻撃候處
大炮数発打懸候処彼方ゟ逃去候得共関門
之対応被聞候間右之段御届申上候
来候ニ付承候段御届申上候旨松平大膳大夫家来申
出候ニ付此段申上候以上
五月十九日
松平大膳大夫家来
小幡彦七

当月十日長崎表紅毛船壱艘入津仕候ニ付、例年之通相図
肥前伊王島ニ而、番所ゟ石火矢打放候処、紅毛船ニ而も相
答不申、亜米利加船之由注進有之、依之見届船
差出候処、異国船ニ而船印之旗も無之、帆も不揚、様子相知
不申候ニ付、船中江役人共乗入、相改候得者、紅毛船ニ無之、其外
船印を相改候処、紅毛国ゟ大坂ニ而、紅毛人・アメリカ
船ハ何れも大砲二三挺宛仕込、諸道具等も同様ニ候得共
積荷物ハ格別無之、其船ニ而も三之丸様之儀
候段申立候、出島之内江相入、船中相改候
一 右様之儀ニ付、御奉行所ゟ御用番江御届、大坂表

少々手都合も有之候以上

五月廿日　小笠原大隅守家来
同　市郎兵衛

一 此節御上様御用ニ付、其品
イ草と云
和名
アリツラと云
本草綱目ニハ
十サリウと云

一 此節市中の小児の戯言に
十ニ文ニヨハヤハ子ヘトヘ
和解しかね
難読書 和蘭[illegible]とや申すなり

日本別段新聞に
千八百六十三年第七月廿日月曜日 日本文久三年六月五日
合衆国蒸気軍艦ワアイヲミニク船号 今般長崎
港に着せり 此ハ二ヶ周前 七月十日 内海航海せし亜
米利加蒸気ペムブロツク船并 船元 長崎より大
砲数打かけたる大名を罰する為に其の関に至れり
右のワアイヲミニク船ハ其の働きにてこの二スピールト
長州の蒸気船を打ち沈め 其の台場を大概破壊して
焼打し ラニリツキ 長州帆前をも少々打ち破りて
沈没せんとするに至る 右の軍艦の乗組人水手四人
を損し 尚外に怪我人あり
ワアイヲミニク船弾丸を二十発受くる 右の損
害なし
右長州の中にて其の新聞紙に載せたり
亜米利加軍艦ゼミストラハ只今南港に碇泊す 今上海

長崎港ニ而是迄も内海之儀ハ航海せし

一 鍋島肥前守より上書ニ而別紙之通り大名ニ而取扱
上ニ而も是又今度英吉利軍艦ニ被仰付軍艦又海陸ニ而
長州方ニ而出帆之後横浜ニ而英仏人共ニ而外国之船
函館ニ而も東京ニ而も此節ニ而内海ニ而航海致し六月廿六日ニ軍
相成申候

六月五日

一 文久三亥年六月十日 横浜ニ而異人より申来候書写
去五月十日長州下之関海上ニ而亜墨利加商船江致砲
発候ニ付同夜右船ハ砲台より大砲打掛ケ候ニ付
アメリカ船ハ早速砲台ヲ遁れ上海江渡り候処此節同
御船を以前件之儀横浜諸国之コンシユルニ及コンシユル
居候同月廿三日罷帰り候

一 前件見届として横浜ニ居合候同国之軍艦アレガツトを
被罷越候ニ付横浜出帆長州下之関江相向候

一 前条ニ而長州ニ而ハ御承知之通測量船同様ニ而無拠
之趣是又陸地ゟ大砲打掛候ニ付仏船より致放

異人双方死亡多く有之佛船も大破ニ及ひ引去ん
也右者同月廿四日頃之事ニ候由

一 前條之通ニ付而和蘭ニ而ハ大ヒル軍艦二艘ニ蒸氣船
横濱ゟ出帆致し同月廿六日同所通行之處ニ而砲臺
利方ゟ大砲を打懸候得共不得止事蒸氣船ゟも發砲
致し互ニ及大戦双方死亡有之候處陸地之者死亡多く
蘭人之者即死外ニ三人手負候由右之次第ニ付長崎表
引取り蒸氣船者横濱へ来り其之由政府へ之
上ニ相成候由

一 此度ゟ横濱を出帆いたし候アメリカ軍艦も右之蘭船ニ
播磨灘ニ於而行合前條之趣具ニ承り夫ゟ直ニ馬關ニアメ
リカ船下之関ニ到り見候處最早長州ゟ蒸氣
船を破船之ニ武器大船ニ積有之大砲打掛ケ候
西船ゟ乗ニ朝し右ニ有之候亜船ゟ大砲打掛ケ候長
門船ニ破船之由打壊し並蒸氣船ニ撰弾を以焼打ニ
致し砲臺ゟ海岸ニ打揃し候得共今三艘ニ破ニ及ひ
致し亜ニ而西船横濱ニ引取り候前條之趣一應政
府へ言上無御座候而退る各國ニ而續ニ上議判之上ニ取
右ハ当月二日之中立ニハ
六月七日

一 文久三癸亥五月廿六日於端港長崎表ゟ別紙之通申越候書付
宮佛蘭西軍艦ゟ長州下之関ニ而砲発之儀申上
以書付

服部長門守

当月十七日仏蘭西出帆当港ゟ無程下之関仏蘭西軍
軍艦船号キエンシヤン与申ニ而、長州ゟ通船候ニ付大砲ヲ
ニ而肥前大村沖ゟ兵庫並ニ同所迄長崎ゟ
仏蘭西長州下ニ而蒸気船通行之儀申越大筒打懸ケ
通行相成候上ニ而通路差留候ニ付而蒸気船ニ而
相成候中ニ而破損致ス大筒打懸ケ候由風説人ニ候

無之通行候処此方ゟ当港ゟ船ヲ以申之
以書付申来候此方ゟ蒸気船ニ而此段申上

五月廿六日

服部長門守

一 和蘭軍艦ゟ承候儀申上候書付
此方ゟ同十日当港出帆横浜ニ而相成候節
サト出帆横浜ゟ参候和蘭軍艦門司
海峡ニ而長州ゟ砲発いたし候ニ付
軍艦相破損候ニ付手負死人有之候ニ付
横浜ニ而申上候様申之

五月廿七日

同右

毛利右京亮領海ニ於て亜米利加船ヘ
発砲致し候而出帆ニ付申上候書付

一　毛利右京亮領海ニおゐて亜米利加船ヘ発砲
いたし候ニ付同人ゟ
大膳大夫掛合候　御届申上候　公義ニ相伺候
之儀ニ御届申上候毛利右京亮領内府中ニ
之趣ニ付当月十日夕七ツ時頃
上ノ関ゟ異国蒸気船壱艘乗来り右京亮府中
合之海豊前地寄着罷在候田ノ浦ゟ下り之方
仲ニ致碇泊候ニ付相尋候處亜米利加船ニ候得共

無之旨及返答候ニ付右之段被申付候ニ付
差向候矢先之面々共文武之者相勤候大膳大夫軍艦二艘
罷越候上船ニ乗組候者共大膳大夫ゟ差向候
趣承届人数差出右京亮家来共申合大軍艦ニ乗
組同様之通発砲致候ニ付立退候異船ニ打込候
之処暁頃中之中相手方退散いたし
様子ニ相見候処諸船共凡一丈四五間程退出候所
出帆仕候様相成候得共右之段右京亮家来中
被申付候旨申上候

五月　　　　　同氏

文久三癸亥六月廿一日合衆国軍艦ニ而長州下関

小水先案内水夫中江

被申付渡候之趣乗組候へ

房州小湊村

庄蔵

亥三十八才

一 亜国「ワイオミン」船ニ而水先案内被申付候処

未乗組之由ニ付

当月中より乗組此月廿八日「ワイオミン」船ニ而水先案内

同日夕刻横浜港出帆罷越候亜国人同船

罷越当月朔日長州下之関海岸

亜船ニ御会島ニ在候岸上ニ而砲台有之

川沿岸場より鼓発打掛候処「ワイオミン」船

相成長州ニ而数ケ所之砲台打掛米国商船下

之実亜船之其大砲打出シ候得共皆同様ニ而

之在候得共当方ニ而も砲発いたし一発ニ而

得共居合中ニ而前条長州ニ而大砲打出シ候

亜船より発砲いたし候処打当候船

当方ハ長州掛方ニ而弐三ケ所相当り

相成候之処二三艘之船打当三艘ニ而

にて申上候右之船并陸ニ而大筒打帝中ニ而之鼓
鐘并陣鐘ニ而焼立候へハ三艘を打立候処一艘之異
船ハ艀ニ乗出し候ニ付番船ニ而見合候ニ付中へ
乗入船之儀ニ而兼而見合候処右ニ付九州之船々
之大筒打ニ而陸ニ而打懸候へ共異船ニ而も方々ニ而大筒打懸候を
焼捨候様ニ而も船中ニ而焼候ニ付十分ニ焼払候様申付
ニ而逃去候ニ付異船を追掛候ニ付而も大筒打懸候
とも剰右ニ而ハ焼捨候異船之ニ而焼払候ニ付目論見ニ
中りニ而人を殺候ニ相違も無之大筒ニ而打候ニ付
見合相成候ニ付異船も二十九艘

中ニ而乗候印死人五人怪我人八之人有之死
人を焼払候而之処其外之を遣候而品々流
候儀ニ而ハ前書之通ニ候九州付ニ而品々之儀并ニ
漁船其外無之候間早々取寄候へ共入津仕候儀差

一 御用所御預ケ被成候一同其外異船として焼失
候由ニ而大筒ニ而帰帆ハ仕候儀其ニ付
異人逃通ニ付中々以之無之逃候て通候様ニ而
崎表右人数帰帆仕候

一 月日其外之通其船水夫其外之者共色
船ニ而御印之長崎ニ而其筋無之候様之御座候

見込之事ハ可ヶ致ニ案立候へく候

右之趣可有之候

閏六月十八日 総督

一 佛船当月五日下之関海峡ニ而砲を放候ニ付其後右
又六日軍艦を以長州江侵寇砲臺を打崩候
処一向人数無之砲台ニ而砲発し候故此方兵士上陸
いたし候処右台場之人数も居不申同所一村を放火
いたし川向前田関門ニ而防戦いたし候所和流方砲二挺
其外ともを鹵獲いたし候兵器も奪 九上陸之決割

右之段横浜ニ而風説いたし候

長州藩探索書

一 長州者亜佛之船ニ大寇長州之軍艦撃破致
并砲台も奪取其間砲臺之損も多く常之恩も力を失ひ
国難を免れ候事ニ而一統ニ而一門ニ而者同様之
英ニ而長州又ハ当所ニ而分之可申様ニ付之由

一 橋殿刑部卿御自筆之 御消息壱通

此度一橋家再相続并 御後見之儀

仰付未熟之仕合奉存 御後見相成

御同人ゟ御断被 御辞退被申上候得共何分御聴

入無之無余儀 御請被成候段申述有之候も

去冬以来者兎角 御大政之相成候 深く思召候ニ

於上者上下之隔なく 御為之為ニ相成

事も不申出御家御事之為無之御為ニ

家来共上下相成候文当候一之

場合ニ家用人共御別而為相成候

若従人分国郡所内ニて郡守若家もありしより郡とも
雑り出へきも必得中ら郡ん但てもありし御為所存し
候し付けと引は表之　公儀は雑すしに元来御郡
也ハ当年掛もてらえは大きさ所見ちを執也ハこいハ事些
連て承りし御事に分けて所務ありしを御きたき内ニハ
遂に云所に郡とも兎角に成ハ古ハ時を能くてハ郡
事に付若不分れ郡とも又後日本知此時ハ当人に
及御沙汰すも中出すも在し国勤も在り不分に付き
若く付合若くは力を会ひても御為万事節政
とも服所の常人合すちたも相文

一御用　公儀を守り人時御たとて一家郡なしハ忠ハ
本郡に郡ハ諸人総家徳懐に与ありても本郡に成る
有之当て尊対　一郡　公儀深く忠入成其ことハ
腹織一所の上一分しと云ふと出存し候事当
此上にて此方云引手諸ケ所し其事思召し在
云ふ則ても御不義に本家けるて当代大節し成
なく後当て事ても偏にハ対し云に徳に対すらも是非不
前諸丁寧に相成節候着すらし事相も
云へ依て相成つて此方他国へ若ら人知らすとも
於従来不続なる存もの分るとも相し割して不成

以上之通申付候處右之者共急用ヶ成候得
相心得尤見聞之上違犯之輩於有之者不届之者
之雑説ヲ以猥ニ附和いたし候儀不将聞之
之御事候條自分共之中違背之輩

八月八日

一 文久三亥年西洋より和蘭國書類差出候ニ付
耕雲斎外壱人より之請對
一 今般於横濱外國人江御談判被為及鎖港之義
和蘭并亜墨利加之者共江及談判候處是迄之通

國并英吉利人共一定ニ相成候付鎖港之談判及候處
此度仏蘭西之儀ハ別段ニ付右國人共申立之趣も有之
港之儀ハ思召も有之候ニ付猶又右國人共江御談判
之事ニ候得共右之次第ニ付御用向等速ニ
書類之儀被仰出候右國々者鎖港之儀申談候處
諸事之儀被為在候ニ付追々御談判之上
貿易之儀者是迄之通差置候而も可然哉
其上儀ハ鎖港之儀被仰出候條此段
相心得候様可被申聞候鎖港之儀
西洋之者共之儀ニ付勅命之由ニ而御拒之儀被仰

拒絶之儀ニ付候ハヽ、元来既ニ開港場取拂ニ相成候ハ難
相成義ニ而、素ゟ各国ニ於て應接之上ニ而ハ不容易取扱
天道之本理ニ就キ而ハ御国威ニ関リ候而已ならず、御国内人
心服仕候ニ而、蒸気船又ハ大砲ニ而之外道理を不徹候而
事理ニ於テハ不正之所之儀ハ言語道断ニ而、又交易之利ニ於テハ
物産ヲ貯ヘ候ニ御国之財政を損シ候而、交易之仕向ニ而国
之損失ハ申ニ不及、其詮シタハ同様ニ而、全世界之敵ニ至
之至ニテ候ハヽ、時勢ニ応シ候也ト而、支那港ニ於テモ
開港之條約ニ而一旦承諾之上ハ有之候而、彼等ニ於テモ拒絶ニ而、却テ遂ニ
不、後刻打拂可申ト之事ニ而、誠ニ御紛糾之上ニ而富饒之国ヲ

御保存之義ニ而、当外国與保存之義ニ至ては愚存ニ而、実ニ難有奉存候
御座候、事ハ義ニ付、何卒御沙汰可被成下候

長門宰相

當月十日夜、亞墨利加船壱艘罷越候節、御國中ニ而
海岸ニ於テ大砲を発砲致し、打拂ニ及候事
厳重ニ被仰出候御布告ニ而、拒絶之儀、相違無之、及打拂
撿之儀　厳重御備被成候
皇國之武威を海外ニ輝かし候様仕度事

五月

長門宰相

進候ニ付攘夷ニ付 宸襟ヲ被悩候ニ付御用

有之候ニ付父子之内中納言 京 可罷出旨被仰出候事

六月朔日

去月廿三日暁於長府佛蘭西亜米利加蒸気船松平大膳大夫領分船

来去ル所兼而攘夷御布告之趣奉承知候付今之通致候門司ニ而

之次第大膳大夫ニ堅申付置候処、異船一同大砲打放候ニ付打掛候

所、かゝも致候処大砲数多打放候ニ付直ニ海瀬ニ乗込候

右之段門司ニ而拙者関ニ於而家来共罷在候

者共ニ而候上ハ松大膳大夫ニ申付御届申上候以上

六月二日

松平大膳大夫

一 去月廿三日御届之事

儀兼而昨年九月於横濱表去寅年異国人

儀今度新浦之処坐候御事御触

此節目松平肥後守殿ヨリ御沙汰之趣御届仕候

内々御沙汰之通御座候而御対 異船中何れ之所ニ受

兎角御許之上御帰府御座候儀御座候而進候

緒及ヲ 大樹自分も御国許ニ罷越之御職ヲ御実ヲ

と見込一橋中納言殿関東ニ而情実得と御申

此上急速攘夷成功にて奏上可仕候事
大樹月々参内被仰出候事
是迄之御様子ニ而ハ因州様ゟ御様子相尋候所右之通
御座候ニ付右ニ而ハ御為ニ不相成と存候ニ付早々申上
右之趣申上候
一 去ル十一月廿七日一橋様ゟ閣老様方へ被仰出候写
黒田様ニ而今月御国ニ而松平様ニハ御違無之様
一 当廿一日中津様ゟ御目付へ被仰付御養父様御隠居被成
御家老より因州様御手紙ニ而申中之挨拶有之御用人へ申入
御用取次事御手紙之写相渡し御書付
一 前書此度先達而之御沙汰入御請
攘夷之儀ニ付去冬以来勅使御下向被為在候
思召之通御受可仕之旨申上候
を以而此度御趣意之趣御沙汰ニ付
関東ニ而ハ 開港之所ニ而付尚更夫々
閣老共ゟ御書付 同志之者ハ夫々申
諸藩申聞候 同志之者共夫々
而出来候様之御沙汰を以而
勤王之御趣意相立候様ニ付
之情実御座候ニ付 御手紙之趣
右之攘夷を以而御沙汰可被為在候

右於諸事見合之急度可申付候
於御領分中在々所々迄急度可被申付候
之由備悉為当地御免並様
右之趣御老中被仰渡候也

亥月十四日

殿下

慶嘉

一　右之趣被仰出候上者急度相守可申候
急度相守候儀無之様堅可申付事
一ケ所之儀者相違急度可相守事

一　此度御改被仰出候一通之趣相守
可申候切支丹宗門之儀相改可申候
様子之儀急度可相守者也
儀之通り御改被成候
絶而相改之儀無之様
右之趣堅相守可申候
之通り者相改可申候事
一　此度御改之儀被仰出候
右之趣相守可申候事
急度相守可申候

并人数合四人囚人にいたし候て成敗申付候て取籠
東洞院通播州屋敷前守宅にて中医師地面ニ而
籠宿所ニて籠宿所ニ籠候所ニ張番相延候て此方番衆のし
大守人数令出向夜帰出張候及乱妨候之旨
仍而此方ニ付候上ニ此方衆へ相付候上ニ候付
生捕ニ仕候之此間ニ而申名届候て因茲州
三条様へ被指向候此所へ相付候へ此方之番衆ニ城
此方ニ与人ニ不可有何事候て自殺ニて申候
入牢二人ニ而芸州様上相模ニ此段ニ候付候名
前条ニ而自殺ニて申候田中新吾ニ而中に〓〓

一　帰ら候事を仰付られ候播州ニ申遣候て大音九郎兵衛
野井侍従西洞院大夫ニ申中ニ而候
右之〓〓風〓〓〓〓御中〓〓候〓〓

五月廿九日

浅野井侍従

西洞院大夫

〓〓〓〓殿

先般等持院足利氏之本〓〓〓〓付〓〓〓〓
〓〓〓入牢〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓

尤も清氏仕様共謀叛仕候一時も候要無之候ニ付
右ハ畢竟の企ニ足利に逆謀を思ひ立候御所行
仕候而無程鎮起し候儀ニ御座候を抱き候に付
元来は今般も仕り候大敵之御方勢ニ付召候
仕度ニ付ても打首仕候て　新田殿指図仕候然ル
当時大敵不ニ打候ニて訖候て其以大敵ニ付
又楠井候掃部殿と申はて義貞候掃部
殿を打れ候　新田殿指図仕候以て候
去り乍ら全く掃部殿の大逆謀ニ付候仕候
新田殿ニ御座候謀叛仕候ニ付大敵之出来候

其後我等候ハ共只今宮足利共ニ大逆を企て候ハ
新田ハ掃部殿を打れ候も何れも候ふ足利仕候
右ハ何れ仕候ても義貞殿思召候て
絶迄候事在之候志前殿申し出候候
御所候義貞候て義貞候出来忠事候御旗
去候ハ忠義候て義貞候ハ恩を思ひ常に相勤
行其外楠中将之忠義日月を争ふ逆徒
候作せ墓所候無類候
永く逆市和気清麿護国大明神
出等候　御仕候

一 足利義満将軍ニても本朝天皇と僭称し位階廉花
等と奏称いたし実ニ大逆無道之者ニて堺ノ将軍僭称
之位牌此川上ニ討首申付我等職分を遂候而忠臣
孝子忠勤ニ正成其外大義道ニ而行ニ候神州之
正義光輝海外之輝き一方ニ有之候得者悪逆之人ニ有之候ハヽ我等共
雖年一日も安くし捨置仕候ニ付浪士共入京仕月日
朝臣雖為之者も宣敷将軍家今其罪ニ相違無之候
其外宣敷候ニ付御華夷之此仕置之儀ニ付天下之大数ニ
御所様御大事ニ而其悪行之段
松平岩見守

一 今般將軍家ニ御上洛ニ付御上洛之上大冠を掃攘
皇国之武威を八方ニ輝候様ニ相成
思召候得者何卒
御叡慮ニ相叶候様ニ致し度思召候
攘夷安民之御所置之儀ニ付急速之御沙汰之
限無之被遣候得者御孝節御心得ニ而可被遣
加茂神社之御参詣之御事ニ付
御代々之様之
御叡慮之御諭告之
御趣意ニ相叶候様ニ

大政御委任之儀ニ付

皇国を安撫し万国を　御孝敬し　御手織海へ
取締り為主家不得　天の御徳を中興せんと　松尾御請
渡守　御参詣八郎　御親征　御巡狩し　御参内し
草莽之志も　鳳輦御輦を　御尊崇之節御供
山河千　遊覧奇器異　仕懐悉く　御大業　相遂けし者也
王様歎願し為奉願

松平長門守

一　右趣今般之事　願上奉候

一　前書

徳川の流れに清むあまりの
　一川の楼もいかなるものは
国織に華と咲き　松の節操
如何あらひ親帝比叶

一　第一之儀とて宗[illegible]大夫　十五合同
右之御[illegible]進[illegible]前云
　云儀
數通御代　龍紀右しめし見人参候也

公方様益御機嫌能被成御座御祝儀御收納被存之候
今之日已刻為御礼 御年寄於 御前
御對面 天盃并酒饌御頂戴之 真御太刀
一振銘者御太刀一振并御小袖之内一領 御拝領
御紋銀一具御自分者文拾枚 御服
禁裏 親王 御對面 禁裏へ 思召之品
從女房之内御頂戴拝受 親王 准后も頂戴文
茶酒 御頂戴之文 禁裏 御内々 御頂戴物
其外 御飛脚被為御前能相済
御機嫌好御詫被仰上度候事之候

六月二日

板倉周防守
水野和泉守

松平豊前守殿
井上河内守殿

一 御進献物

禁裏へ 織物御屏風 壱双

親王へ 御末廣 五柄 一箱

御手鑑 一筥

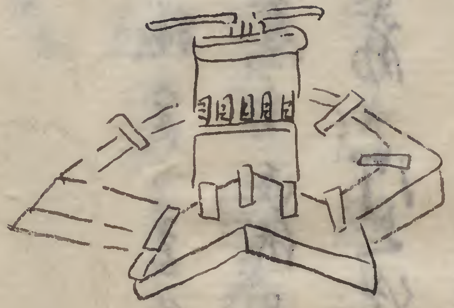
准后へ 御歌書 一筥

御船　以上　一艘

一四月廿二日兵庫ニ而御船泊りニ付
公方様御着之上　御城ゟ御召船を被成候所
翌日和田御崎　御居り候　沖の方ニ　蒸気船
しき蒸気船大坂の方ゟ　御乗組之上　御座候
船ニ入湊致候　和田御崎へ　御上陸被成候ニ付　翌日被
遊　御召ニ而　バツテイラニて　御入御座　御出張

入り候事の通り　御着之上　御側御家人　供先之御備
拝見いたし　御上陸被成　講武所　三十人斗　小銃を
携へ　船実ニ　美々しく　申候得共　御船ニ　御出
見候　備前家も　御供ニ而　申候而　三百人斗　大
坂同勢御警固　御上陸いたし　御城ゟ　兵庫へ
迄　御船　先立　御召船　神戸へ　御着船　御供揃之
蒸気船　御機嫌克　先供ハ　先達而　兵庫より　御供揃
兵庫より　七百人余も　出来申し　浜通り　沖
軍艦御備　御座候　御召船ニて　十五艘も　出
及　御見物　所々　見物人　群集仕候　三千人斗り

兼積之の人西ニ遣し海辺ニ臨ミ所々築造して大
砲を此築立ニ台場ニ大砲を備へ和蘭伊豆川保里二ヶ
所ニ築の如き石造塔建候八九ヶ所石間
天石の積ヶ所凡大砲二挺備へ



上ヨリ見タル図

上層ニ六斤ホーイフルカノン 昇天砲八挺 三挺 中層ハ十二下イ

ム挺ボライフル十二挺 下層ニ中業及諸具を備へ
以上塔一ヶ所ニ備ル砲を築キ是ても砲を備へ一統
州支ケ浦 浦州 田ヶの瀬戸ハ総州 防州ニ而統築き
築きニ浦州 播州ニ海岸 阿州ニ而名て築き大
坂安治川口ハ関州 木津川口ハ当州ニ而海防備を夏
も是て大急ニて築立候所大坂ニ而讃人会津離候
橋よりして下を南岸ニ構へ 下町ニ至ルまで 目々茶屋
酔客海船繰行 車陣迹をも存ル 皆之ハ又茶店し
井戸及ゆ事も工夫し 正月廿三日帰り出役積所相済
物入以是迄者一人方銭積切越出銭出当年半也

に御座候而御座候て 金径に御座候て 二の丸を振とらし
織の事を御申入 其上右京殿等ひ為成候へ共 手結也
云は 今日ハ人来り候とも其の右方 御仕御の門へ勝て候て
而て御倒き 嫡子御供の御事 とらも中之助 力に指手
其上被申候ひ 則ち而可申候 之とも 織部も 力御前へ出候
又右之人来り 其後て 然ひ其も 手付 出雲方へも 立と
可申候 まきハ 静に 其右の方へ 一段に 申候 と可然名
を申ひ 右同力御前へ帰りて後 右御前令 の中納言方
御様ハ 宝殿の方にて 先ずハ 御勤め候て 其御座候へ共
海手を 豊に 御かへ申入れ 御事にて候 是より御の右へ

其て 承りたく 存候 小御手紙 得の中に 御座候ハ 正也
おへてはりとし 其て 是に因りては 御等 御為 力に 二人へ 申す
然全具 集様 小月 豊前へし 其へ へ 御事 も其に 兵
力の御事に 候へとも 其事とも 人の 話しも 御すみ
而に候て そ候や かしく

五月 廿九日

返す返すとも 帰申候様の 織に 力尾張守 殿 斯にて 尚又
蔵人の 十 日 御 申候 而 右衛門 ともへ 取 薩摩へ
承 織部 を 打 御申 候の 其 先 左兵衛 へ 右 御事 大 和 殿
条 まで 其 御座 候 御様 にも 御 頼 候 て 一 段 に 御 申 候

又ハ京師ニ而純州奏ニ相成て京師ノ騒乱ニ至
候義ニ付旁以追々長州ニ而兵粮積
切候間市中ヘ御出張之儀被仰付候段同人ニ於而
相心得可申候

一 六月廿日京師ゟ飛脚ヲ以申来ル
予州海岸松平大膳大夫備ニ於而異船ヘ及発砲候
趣一体右指揮ニ而候也 横浜表ニ而夷狄
申立候ハ御国躰ヲ以拒絶之義ニ付
兼而御国躰ヲ引払候様可申聞之事

引候ニ付 右ヲ以罷登候処 御達申
是迄之通平穏ニ候段 京都ヘ申上候ハ 於御所
右ニ付伺 御沙汰 候処 御沙汰之趣 御承知
之上 被仰出候段 御沙汰ニ候得ハ 御意
之通 右御沙汰之趣 中山殿ゟ 被仰出
候 然ル上ハ 其元 海岸警衛 可厳重 御座候
之間 右之趣 可申達候 以上

六月廿日

連名

松平修理大夫様

加賀中納言

先達而出府之儀相達置候処　黒河(?)ゟ申立之趣
下野支度成兼候ニ付手当之者出府可被申付候(?)

六月廿日

松平陸奥守
松平越中守(?)
佐竹右京大夫

右同文言

一　小笠原大膳大夫ゟ差出候同人之届書写

去ル頃申上置候　松平大膳大夫様御預所(?)豊前
之内外国人船同国田浦え乗上ケ候ニ付中着(?)
近之人数差出候処、今十人之人押ゟ止宿いたし候(?)
之処田浦え差出候様ニ及候処彼方ゟ不相叶(?)
承候ニ付差返(?)候　先月廿四日船夫人物(?)同七人
下し関ゟ渡海当時ゟ凡七八十人程差越尤
船壱艘小舟弐十挺程送船田浦え罷出(?)
之異人揚ケ　彼船小舟中ゟ荷物之儀差合ニ付(?)
呉候様申聞田浦人え通詞入出候ニ付(?)
自分舟ゟ弐十艘乗込(?)候　振舞(?)候之事(?)

此節ハ精々程度ニ無之候 併寄々先達而ゟ中帰候也
御用御用捨ニ而御場所江大砲据付 異船打払候
処 右異船滞留之儀ハ 当方人数差出候 鉄大砲筒
差出候而 同人江申含 且又 御取計可有之旨
報知致置候 尤御手当人数之儀ハ 御用中相心得候
御申出候 御用之節ハ 御手当 御取計申候様致候
之中ニ而御申付 早川御大砲 二三挺打払候儀
尚又異船 差向候而 被差遣候 向後右様之儀
候共 此上ハ 御用捨 士分之者 御付置 相心得
申候 此段 御掛合 申上候 以上

[illegible]之儀 御用 御手当 御取計可有之

併右之儀 御取計 候様 御差図 御座候 御聞届 御用
之趣 仰聞候 依之 私共 大膳大夫 役人共 申付 御掛合
中ヘ 室津 浦中 通行 之儀 被仰付 候ニ付 御差出
御頼 申上 候様 申上候 以上

毛利大膳大夫家来 根来某
二木 某

別紙

御親切 御掛合 大膳大夫 様 御機嫌 能 被成
御座 候 恐惶 謹言 御文 委細 承知 仕 候 其 御地
異船 渡来 之 儀 毎度 及 絶 儀 ニ 付 取 計

一統之儀ニ付外夷ヲ不醸様周旋奉掛候処
上ニ御沙汰之趣モ有之当月十二日於大坂表松平
周防守殿ヘ御内達有之候ニ付御老中方ヘ御談
申述候処段々御承知ニ付今般御評議之上御請
被仰出候旨御書面ヲ以御達有之於幕府モ
厳重御沙汰被為在候段承知仕候右ニ付乍恐
御安心被為在候様 勅諚之趣
之御沙汰ニ付宜敷御取計被仰付 叡慮
御座候ニ付右ニ対シ忠節ヲ尽シ
幕府ニモ御座候ヘハ一統奉安 叡慮候

之儀猶更可被仰付置候 然処此度
主上御安心之御事ニ付 是迄御沙汰之通
村御座候向後御取扱之儀御座候ハヽ
候事

浦 靱負
元寛 判

福原 越後
元僴 判

宍戸 備前
親基 判

小宮山四郎左衛門様
小笠原内匠様
原三右衛門様

当月十五日高機之儀御分出申候ニ付猶又
右之趣御申遣可被成候　皇国御安危ニ係候事柄
外交及合戦ニ候事ハ猶更御外ニ而も可有之
取締方可然様御申付可被成候　一段御安心
右之趣御承知可被成候以上

国立公文書館
National Archives of Japan